

# 郷土文化財紹介 神社、寺院シリーズ <星宮神社と八田氏>

山口側から弥栄橋を渡ると新田交差点です。右折すれば直ぐ左手に消防小屋があり、そこから60メートル程道なりに進むと左手に脇道があります。これを奥へ入れば星宮神社の小さな祠に出会う。この位置は西方寺面が阿寺断層の活動で2メートルほど隆起した部分の崖であり、かつては万場平(相沢)の一部であったと考えられます。

↓ 星宮神社



先ず「星宮」神社ですが、下野(しもむけ、栃木県)と常陸(ひたち、茨城県)に多くあり、他の地域では数県に1、2社あるのみのようです。祭神は、北斗七星、金星、虚空蔵菩薩、磐裂・根裂、瓊瓈杵尊、天之御中主命などです。虚空蔵菩薩を本地とする神社は白山信仰との関わりがあるようです。その代表は郡上市にある星宮神社です。金星特に「明けの明星」は、天香香背男命(あめかかせおのみこと)または天津甕星命(あめつみかぼしのみこと)を充て、悪神ではあるが祀り込み輝かしい将来と幸福を願うようです。

さて、坂下の星宮神社は、いつ頃誰が何の目的で建立したものでしょうか。星宮神社の棟札が残されており、表は「宝暦九己卯天春正月十三日 奉勧請曜星宮神殿造立

成就攸 八田氏家子孫長久除災與樂攸 八田以宗治宗重志」裏は「寛文十三歳卯當稔マヂ 凡八十七歳成候 天下和順五穀成就攸右万場平中増福延命祈」とありました。宝暦9(1759)年、八田以宗治が勧請し八田氏の長久除災与樂を願い、天下和順で五穀も良く実ることに感謝しつつ、万場平中の増福延命を祈願しています。

→坂下神社右脇社に保管されている  
「奉勧請星宮」の札



もう一つの棟札ですが、「奉再建星宮覆葺満願之處 宝暦第九己卯稔至春正月十三日上遷宮 本願人八田與三兵衛本家二代目八田與左衛門其後行歳社礼相不知元文三午而八田惠七郎同門七郎志主」とあります。前の棟札と合わせると、寛文13(1673)年から87年初代与三兵衛、2代与左衛門、・・・、そして惠七郎、門七郎、以宗治と引き継いでいます。「奉再建星宮・・・」とあるところから、星宮信仰は以宗治以前から行われていたとも考えられます。

また、町史によれば、この中の八田恵七郎は、享保20年(1736)から延享の初年(1745)頃まで町組庄屋を務めています。くしくも<原市右衛門の石碑>で触れた原市右衛門庄屋の後を受け継ぐ形です。数代にわたる原市右衛門同様、坂下の基盤

構築に関わった人達と言えるようです。

この八田氏ですが、常陸国真壁郷八田村の出身でないかと考えられます。鎌倉時代、坂下の隣大桑辺りを中心とした小木曾庄を常陸国の大桑氏が所有していました。そして、大桑氏は木曾の3ヶ所に鹿島神社(常陸国一之宮)を勧請しましたし、大桑の殿に白山神社、熊野神社なども建立させています。南木曾町史にその様子が記されています。このころに大桑氏の家臣として八田氏は常陸から木曾へやって来たと思われます。1400年代になり小木曾庄から大桑氏の姿が消えてしまいますが、八田氏は木曾の地に残り木曾氏の家臣として室町時代から戦国時代を生きぬいたのではないでしょうか。そして、木曾氏が秀吉により木曾

を追われた頃、原市右衛門等と共に坂下の地に移り、その基盤を先ずは松原地の字「平」で作ってきたものと思われます。そして、寛文13年「万場平」へ住居を移し万場平の開発を竹之腰や茂中の人達と進めたのでしょうか。83年という長い時の流れを経て以後の更なる発展を願うとき、遠い先祖達の住む常陸国に思いを馳せ、その地の星宮信仰や鹿嶋信仰こそと心を移したのでしょう。

以上のことから、坂下星宮神社は八田氏が自分の出身地である常陸国から一族の守り神として持ち込み、万場平の地に根付かせ万場平の久しい安穏を願ったと考えられるものです。